

秋が来た。あんなに暑かった日々が嘘みたいに落ち着いて、山々は朱に染まりだしている。外だつて過ごしやすくなって、皆休日にはどこかへ楽しげに出かけていく。それなのに俺たちは男三人、大学生にもなつて部屋の中でトランプだ。意味が分からない。折角の休日にいいから来いと呼び出され、なにがあるのかと来てみれば、始まったのはトランプ。いい加減飽きてきた。

「なあ、暇だ」

なんの期待も込めずにただ思ったことを口に出した。

「まあ待て、栄治」

「もう少しで来ますから」

真剣な表情でば抜きをしているこいつらは、大学の同級生と後輩。

「誰が？」

「栄治先輩の好きな人です」

「お前に好きな人の話をした覚えはないんだが」

「僕もされた覚えはないです」

相変わらず適当な後輩だな、と呆れているとチャイムがなった。

「はいはい！」

返事をしつつ秋山がドアに向かった。

「先輩かわいい子好きですよね？」

「かわいい子は好きだけど、それと今の俺たちとなにが関係あるんだよ」

トランプを片づけだした後輩が、よく分からない質問をする。

「ありまくりですよ」

その返事に、もしかしたら可愛い子が来るのかとちよつと期待した。

「ほら！ ユウが来たぞ！」

客人を連れて秋山が部屋に戻ってきた。その横にいた子は確かに可愛かった。金髪だし、目の色も日本人離れしていた。人形みたいって多分こんな子に使うんだろうな、とも思った。確かに好きかもしれない。これで少年じゃなければ、だけど。

「こんにちは」

「ユウ君久しぶりー！ 相変わらず可愛いね！」

照れくさそうに笑つたその子と目があつた。

「あつ！ 栄治先輩と目なんか合わせちゃダメだよ」

「どういう意味だ！」

「栄治先輩かわいい子好きですよね？」

「好きだけど、これは違うだろ！ お前の中の俺はどうなってるんだ」

「秋山先輩の次にヤバイ人です」

「それは秋山がかわいそうだろ」

「いつの間に、俺がかわいそうな話になつてんだ！」

「まあまあ。そんなことより早く行きましようよ」

「どこに？」

「今は秋だぞ、決まってるだろ」

「これしかないでしょう」

そういった二人はニヤツとして答えた。

「宇宙人探し」

あの時、笑って付いて来ないで全力で拒否しておけばよかった。そうすれば山に来ることも、獣道を歩くことも、熊に会うこともなかった。ただダラダラとトラップをする休日でもよかったじゃないか。過去に戻るなら俺を殴って止めたい。いや、俺を殴るのはかわいそうだからこいつらを殴って止めよう。そうしよう。

「宇宙人見つかんねーな」

「ですねー。栄治先輩ちゃんと探してます？」

「探してる、探してる」

適当な返事をするが、探してるわけがない。そもそも探そうとも思えなかった。宇宙人がいれば面白いとは思うが、こんな近所の多少高いくらいのも山で見つかるのはイノシシや熊ぐらいだ。がさがさと茂みをかき分け、道なき道を進んでいく秋山と後輩。もう日も傾いてきて大分暗くなってきた。正直そろそろ帰りたい。ギャーギャー言いながらがっさがっさと進んでいく二人の背中に、何度そう投げかけたことか。

「ユウ君は大丈夫？」

「うん。大丈夫」

息切れ一つせずに笑顔で言われた。

「そっか、子供は元気だなー。ところでユウ君はあいつらとはどういう関係なんだ？」

ユウ君は困ったように笑いながら『んー……内緒！』と言った。

一瞬俺なんかよりもヤバイとされる奴と、ヤバイ感じにヤバイ関係なのかと思ったがさすがにそこは友人として信じてやらないと、と思って考えなかったことにした。

「お？そろそろ時間かー。結局今年も見つからなかったな」

「そうですね」

「疲れた」

こんなに歩いたのは久しぶりだ。こいつら相手に無駄にエネルギーを使ったのもあるだろうが、全身を疲労感が支配していた。

期待していたわけじゃないが、頂上まで来たところで結局宇宙人なんて見つからなかったし。

「栄治先輩、元氣出してくださいー」

「そうだぞ！ 宇宙人が見つからなかったのは残念だけど、そんなに落ち込むなよ！」

「違うわ！ どう考えても原因お前らだろ！ そもそも宇宙人なんて初めから本気で探してねーよ」

「なんでだよ！ じゃあお前は何を本気で探してんだよ！」

「彼女か！ 彼女ですか！ そりゃ本気出さなきゃ見つかりませんね」

「本気出しても見つかってねーよ！ 言わせんな！」

「うっわ……栄治かわいそ」

「まあ宇宙人探しも本気でできない人なんて僕が女でもお断りですが」

憐れんだような目で二人が俺を見る。

「なんで宇宙人探しがプラスになってんだよ！ 本気でやるやつの方がやだわ」

「何事にも真剣に取り組む男はかつこいいって言葉を知らないのか」

「限度があるだろ」

「限界を超える！」

「その線は超えちゃダメな気がする」

「もう手遅れですよ」

「いやいやいやいや！ 大丈夫！ お前らと比べれば俺はまだ大丈夫！」

「一緒一緒。むしろ俺とお前で違うところを探す方が難しいくらいだ」

「真顔で言われると恐怖を感じるからやめろ！」

「秋山先輩と何もかも一緒とか、僕なら泣くレベルで嫌ですね」

「本人目の前にして言っちゃう？俺が泣くよ？」

「元氣出してください」

「え？うん……」

そんなくだらないやり取りをしているとユウ君が夜空を見て、『あ』と小さく声を漏らした。

「お？来たか？」

「今来てる」

「なにが？」

こんな時間、こんな場所になにが来るんだ。そう思いながら俺は上を見た。そこには、予想以上に綺麗な秋の夜空。いつもは町の明かりが邪魔をして霞んでしまっている星も今日はハッキリ見える。邪魔なものが無いとこんなにも綺麗に見えるのか。疲れた心を癒すように、ぼーっと星を眺めているとその一つが動いた気がした。

「ん？」

「あれだ！」

「来ましたね」

「おーい！ こっちこっち！」

秋山がまるで友達にするかのように気軽に手を振る。その間にも光はどんどんとこちらへ近づいてきてユウ君の前で止まった。あまりの出来事になにも反応ができなかった。

「いやー！やっぱかつこいいいな！」

「凄いですよね」

「ありがとう」

振り向いてお礼を言うユウ君。その後ろに浮いてる光。まるで映画のワンシーンみたいだった。太陽の光をバックに笑う、人形のような少年。しかし今は夜で、光っていたのはUFOだった。どっからどうみてもUFO。カップの麵的なあれではなく、未確認飛行物体だ。

目を見開いてみてもその光景は変わらなかった。呆然とする俺をよそに三人は別れの挨拶をしだす。

「遊んでくれてありがとう。楽しかった。また来年もくるね」

「いえいえ。楽しんでもらえたならよかったです」

「また来いよ！ 来年どこ行くか考えとくからな」

「あの、栄治さんも遊んでくれてありがとう」

「え？あ、ああ……」

「また来年も遊んでくれる？」

「も、もちろん！」

あまり意味を理解しないまま俺は返事をする。

「よかった」

安心したように笑うと、ユウ君はUFOから出る眩しい光に包まれて消えた。ユウ君が消えるとそのUFOは徐々にスピードを速めて、夜空の星の合間に消えて行った。

「じゃあなー！」

「またねー」

手を振る二人。消えたユウ君とUFO。また来年という言葉。目の前で起こったことを飲み込めない俺。

「なん、だ？」

「見りゃわかるだろ。宇宙人だ」

「今日一日かけて探してた人ですよ」

当たり前みたいに言う秋山と後輩。言いたいことは沢山あったが、脳をフル回転させて出てきたのは情けないことにこの一言。

「……まじで？」

「まじまじ」

「会えてよかったですね」

「うわあああああああすげええええええええええ」

小学生みたいな感想を叫んだ俺の頭からは、山を下りなきや帰れないことなどすっかり抜けていた。げっそりしながら山を下りて家に帰るまでの間にユウ君のことを色々聞いた。どうやらあいつは、怪我をして落ちていた所を二人に助けられてから毎年遊びに来てるらしい。宇宙人でもUFOから落ちて怪我したりするんだなあー、とかなんとなく思いながら俺は疲れた体をベッドに沈ませた。今頃UFOの中で、なにが報告されているかなんて知らずに。

「今年も大して変わらなかったよ。……うん。害はなさそうだから取りあえずそのままがいいと思う」